

関ノ口遺跡

—第8次発掘調査報告書—

2021

姫路市教育委員会

序

JR網干駅の北側に位置する閔ノ口遺跡は、姫路市が施行する網干駅前の区画整理事業に先立つ試掘調査によって新たに発見された遺跡です。

これまでに7次に及ぶ発掘調査が実施され、弥生時代から古墳時代、奈良時代、鎌倉・室町時代にかけての集落遺跡であることがわかりました。さらに、最近の調査では縄文土器が出土したことにより、地域の歴史がさらに古くさかのほることも明らかになりました。

本書は、閔ノ口遺跡で令和2年1月から2月にかけて実施した第8次発掘調査の成果をまとめたものです。今回の調査でも、古墳時代初頭の竪穴建物をはじめ多くの遺構を確認するとともに、良好な状態の縄文土器が多く出土しました。

最後になりましたが、今回の発掘調査事業の実施にあたり多大なご協力を賜りました石海株式会社様をはじめ、関係各位に心から御礼申し上げます。

令和3年(2021年)3月

姫路市教育委員会

教育長 松田 克彦

例言

- 1 本書は、姫路市網干区和久に所在する閔ノ口遺跡(県道跡番号020334)第8次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、姫路市網干区和久509-1における建物建設工事に伴い、石海株式会社 代表取締役 富岡 優一と委託契約を締結し、姫路市教育委員会が実施した。現地での本発掘調査は、姫路市埋蔵文化財センター福井 優が担当した。
- 3 本発掘調査は、令和2年1月14日から同年2月27日にかけて実施した。調査面積は447m²である。
- 4 本書の編集・執筆は福井が行い、遺構および遺物写真は福井が撮影した。
- 5 本報告にかかる調査の記録、出土遺物などは、すべて姫路市埋蔵文化財センターで保管している。

凡例

- 1 発掘調査を行った測量は、世界測地系(測地成果2000)に準拠する平面図直角座標系第V系を基準とし、数値はm単位で表示している。
- 2 本書で用いる標高は、東京湾平均海面(T.P.)を基準とし、使用する方は世界測地系の座標北である。
- 3 本書で使用した地形図は、姫路市基本地形図を使用した。
- 4 遺構の略称は、以下のように呼称している。
SI: 竪穴建物、SD: 溝状遺構、NR: 旧河道
遺構・土層等の呼称は、調査時の遺構番号を基本とするが、整理に際して変更したものもある。
- 5 土色・土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編2003『新版 標準土色帳 25版』日本色研事業株式会社に準拠した。
- 6 拓本を用いた破片の実測図は、右から外側の拓本、断面図の順に配列している。
- 7 拓物番号は基本的に通し番号とする。
- 8 本書に記載した石器の重量計測には大和製衡株式会社製HB3000を使用した。
- 9 本書に記載した石器の重量計測には大和製衡株式会社製HB3000を使用した。
- 10 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・写真図版とともに一致する。

本文目次

序・例言・凡例	
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 本発掘調査	1
第2章 調査の成果	1
第1節 調査概要	1
第2節 遺構・遺物	2
第3章 まとめ	5

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

調査の経緯 姫路市網干区和久509-1において、鉄骨造3階建て建物(面積約593m²)の建設が計画された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である関ノ口遺跡(遺跡番号02034)に該当している(図版1-1)。

平成31年4月5日付で石海株式会社より文化財保護法第93条に基づく届出が姫路市教育委員会生涯学習部文化財課になされ、遺跡の取り扱いについての協議が行われた。関ノ口遺跡ではこれまで7次にわたる調査を実施し、多くの成果を得ている(図版1-2)。今回はそれら既往の調査成果を確認調査に代えることとし、工事により遺構面が影響を受ける範囲の取り扱い協議を行った。協議の結果、遺構の現地保存が困難な建物基礎に係る掘削範囲について記録保存のための本発掘調査を実施することとした(図版2-3)。調査面積は447m²である。令和元年5月31日付の通知に基づき、令和元年12月17日付で姫路市と事業者で委託契約を締結し、対象となる範囲の本発掘調査を開始した(遺跡調査番号20190496)。

第2節 本発掘調査

第8次調査 姫路市教育委員会からの発掘調査の指示・勧告に基づき、建物の基礎工事により地下の遺構・遺物に影響が及ぶ範囲の調査を実施した(図版2-3)。盛土や耕作土、床土(土壤化層)については主に重機による掘削を行い、遺物の採集にとどめた。それより下位については、人力により精査した。調査終了後は出土品等の整理作業を行い、本書の刊行をもって事業を完了した。

現地での発掘調査から整理作業終了までの調査体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会事務局

教育長 松田 克彦

教育次長 坂田 基秀(～令和2年3月31日)

岡本 裕(令和2年4月1日～)

生涯学習部

部長 沖塩 宏明(～令和2年3月31日)

福永 安洋(令和2年4月1日～)

文化財課

課長 花幡 和宏(～令和2年3月31日)

大谷 輝彦(令和2年4月1日～)

課長補佐 大谷 載彦(～令和2年3月31日)

技術主任 関 梢

埋蔵文化財センター

館長 前田 光則(～令和2年3月31日)

松本 智(令和2年4月1日～)

課長補佐 岡崎 政俊

森 恒裕

技術主任 小柴 治子

中川 猛

南 蔦和

福井 優

技師 黒田 純介(～令和2年3月31日)

山下 大輝(令和3年1月1日～)

技師補 山下 大輝(～令和2年12月31日)

第2章 調査の成果

第1節 調査概要

調査地の現況 調査地の現況は道路及び駐車場で、標高は約6.8mである。図版4-1は調査区の各地点の基本土層である。層名は、盛土を1層、耕土を2層とし、遺構埋土等をそれぞれ網掛けで表示している。ここで、地山および遺構検出面のレベルについてみてみると、調査区北東隅に位置する断面①、調査区南東隅に位置する断面②、調査区南西隅の断面③のいずれの地点でも約6mを測る。これにより、当該地は、ほぼ水平な地形を呈していたことがわかる。

検出遺構 今回の調査で検出した遺構は、堅穴建物3棟、土坑13基、ピット48基、溝状遺構4条、旧河道1条と、旧地形の落ちである(図版2-3)。多岐にわたる遺構のうち、本書では、弥生時代以降の遺構として、堅穴建物2棟(SI2-3)と溝状遺構(SD4)、旧河道(NR1)を探り上げ、また、縄文土器が出土した埋没旧地形の落ちについてふれることにする。

第2節 遺構・遺物

豊穴建物 3棟検出した。このうち、SIIは後世の削平が激しく、周壁溝を僅かに残すのみであった。そのため、ここではSI2・3について述べていく。

SI2 (図版2、4-2)

形状・規模 調査区西側で検出し、6次調査1区へと統く。平面形は、楕円形とも卵形とも捉えられる不整な形状を呈しており、長軸4.9m、短軸4.5mを測る。検出当初は土坑として認識していたが、底面上で炭化材と焼土塊を検出したため、豊穴建物として積極的に評価したい。なお、床面上で燃焼施設や周壁溝は確認していないが、中央土坑と思われる浅いくぼみ状の落ち込みを検出した。検出面からの深さは約15cm、床面の標高は約5.8mである。

出土遺物 器種不明な弥生土器の小片が出土した。

SI3 (図版2、4-3、6-1)

形状・規模 調査区東側で検出し、南西側は後世に削平を受けている。東側は2次調査の調査区へと統いている。今回の調査成果のみでは平面形は不明であるが、現在整理作業中の第2次調査の成果と合わせると、平面形は短軸5.5m、長軸6m以上の隅丸長方形を呈すると思われる。先述のSI2とは異なり、床面上で炭化材や焼土塊は確認していない。床面の壁際では径10～15cmの平面円形、深さ約10cmのピットを9基検出した。これらが、何らかの建築部材の当たりであるとすると、床面に柱穴がなかったことと関連すると思われる。検出面からの深さは約15cm、床面の標高は約5.8mである。

出土遺物 床面直上で、古式土師器の壺1が出土した。1はいわゆる庄内形壺の口縁部から肩部の小片で、口縁端部の外側には僅かに面を持つ。肩部外側には右上がりの細密なタタキが僅かに残る。肩部内側には接合痕が残る。器壁が粗いが、内面は左上がりのケズリと思われる。

時期 古墳時代初頭の新相に比定できる。

溝状遺構 溝状遺構としてはSD4について述べることにする。それ以外は概ね中世に帰属する。

SD4 (図版2、5-1、6-2)

形状・規模 調査区の北西部から南東部に延びる。幅は18m、深さは40～50cmを測る。断面形は一定せず、隅丸の逆台形を呈する部分(図版5-1上段)もあるが、同下段のように緩やかな傾斜を見せる箇所もある。底面のレベルは、北側で概ね5.4m、南側で5.6mを測る。埋土の大半は粗砂と小径の円礫が主体で、その間に細砂もしくはシルト層を挟む。このうち、1～3層と4・5層の間には時間差があるようと思われる。土層断面の観察所見と、複数の不連続面を確認したことなどにより最終的には洪水で埋没したものと考えている。また、大きく二時期にわたる埋没過程において、自然堆積層を掘り返したような痕跡がみられないことから、使用時の機能については不明と言わざるを得ない。

出土遺物 コンテナ(天界電気工業製テンバコP18、約18kg入、以下テンバコP18)に13箱の出土量であった。大半は弥生土器と古式土師器が占める。遺物については、可能な限り層位毎の取り上げに努めたが、特に層界付近では帰属層の判断が困難なものも多い。ただ、出土傾向としては、概ね上層に古式土師器が、下層に弥生土器が多い印象である。

2は古式土師器広口壺の底部である。胴部外面には右上がりの平行タタキが、同内面には左上がりのハケメが残る。成形時に落ち葉を使用していたようで、底部外面には二葉分の葉脈痕がみえる。断面観察から底部は最後に粘土塊で充填していたことがわかる。3は壺の口縁部である。端部外面に面を持ち、強いヨコナデによる凹線状の凹みが、受け部には接合痕がみえる。内面は強いヨコナデで仕上げられている。断面には肩部との接合痕が明瞭に残る。4は高杯の脚部である。中実の外面には縱方向の匙面状ミガキが僅かに残る。器壁が粗くそれ以外の調整については不明である。5は小型の器台の裾部と思われる。外面には金属ではない銳利な工具により横方向の平行沈線文帯を三段配置し、その後に最下段に縱方向の3条の平行沈線文、左下がりの平行斜線文を施す。その上段には広い斜格子文帯がみえる。それ以上には施文はなされていない。内面は反時計回りのケズリが残る。6は小型の器台の脚部である。裾部外面にはヘラ状工具による左下がりの鋸歯文がみえる。内面は板状工具によるナデつけの痕跡が残る。胎土はやや精良である。7は広口壺底部である。外面には仕上げのナデ・オサエ、内面には底部の粘土円盤とそ

の周間に立ち上がる器壁を構成する粘土紐最下段とを接合するための粗いナデ・オサエがみえる。これ以外にも粘土紐の接合部分が剥離した痕跡も残す。

時 期 上述したように層位毎の明確な時期差は不明瞭ではあるが、上層から出土した2~4は古墳時代初頭に、下層から出土した5~6は弥生時代中期後半に、7は同前半に位置づけられる。

旧 河 道 溝状遺構としてはSD4について述べることにする。それ以外は概ね中世に帰属する。

NR1 (図版2、5-2、6-3)

形状・規模 北西から南東方向の流路左岸の肩部で、緩やかに南西側に傾斜する。深さは15~20cmを測る。

出土遺物 8は弥生土器広口壺である。割れた状態で出土したが、ほぼ完形に復元できた。上下に摘み出した口縁端部には四線を施し、頸肩部には指頭圧痕文突帯を巡らす。やや強く張り出した胴部最大径付近には板状工具の小口による右下がりの刺突を配する。頸部にはやや左上がり方向のハケメが、胴部上半には縱一や左上がり方向のハケメが残るが、両者では使用する原体が異なる。胴部最大径付近には横方向の、同下半には左上がりの匙面状ミガキがみえる。口縁部内面には、二孔一对の小孔が対向する位置に二対穿たれており、うち、一对については対向する小孔を持たない。正面であるために小孔を穿っていない可能性があるが、調整や施文等にそれを意識したと思われる傾向は見えない。その内側には頂部に刻目をもつ突帯が二条巡る。頸肩部には外面調整に伴うオサエが多用される。胴部上半には右上がりのハケメ、板状工具によるナデつけ、同下半には同様の調整が左上がりに行われている。胴部最大径付近では、胴部上・下半の接合痕跡が残る。全体的な器形には歪みがみられる。これは頸部の指頭圧痕文突帯が整美に貼り付けられていない点からも焼成によるものではないと思われる(写真図版3-8)。このような非対称の器形は当該期を含めた播磨の弥生土器の特徴といえるのかもしれない。9は壺の口縁部から肩部である。口縁部内外面にはやや強いヨコナデが、肩部外面には微細な縱方向のハケメが残る。内面は左上がりのハケメの後に外面調整に伴うオサエがみえる。

時 期 概ね弥生時代中期後半に埋没したと考えられる。

縄文時代の旧地形 上述した遺構が位置していた締まりのかなり強い砂礫層は調査区南西側で急角度に傾斜しており、その斜面の堆積土から多くの縄文土器とともに石器が出土した。後述するように、本来はこの斜面東側に本来存在したであろう微高地の崩落に伴い転落したものと考えている。ここでは、旧地形の落ちとして報告する。

埋没旧地形の落ち (図版3、5-3、6-4、7、8)

形状・規模 調査区の西端で検出した。傾斜変換線は北西から南東方向に延び、南西側に向かって傾斜する。また、工事の掘削によって影響を受ける範囲内で調査を行ったため、底面までは達していない。

堆積状況 埋没旧地形の落ちに堆積していた土層は図版5-3のとおりである。そのなかでも、5·6·8·11·12層は特徴的な土層であるため、ここで触れておきたい。まず、5層はしまりの強い粗砂・砂礫主体の土層で、落ちの肩とほぼ平行してみられる。先にふれたSD4と同様、鉄砲水等の洪水に伴う下刻の痕跡である可能性がある。8層は黒褐色を呈する粘質土層で、後述する炭化粒とともに多量の縄文土器及び石器を含む土層である。堆積状況から人為的な堆積ではなく、本来存在していたと思われる東側の微高地からの崩落土で有機質を多分に含む状態であったと考えられる。

6·11·12層は当遺跡の健層となりうる土層である。6層は灰オリーブ色を呈するシルト層で、やや不安定ではあるが、その上面が弥生時代中期後半以降の遺構面となっている。11層はにぶい黄橙色を呈するシルト~粘土層で、姫路平野で通有の地山層に酷似する。当遺跡におけるこれまでの調査では弥生時代前葉以降の遺構を確認している。12層は暗緑灰色を呈する砂礫層で、本調査区のほぼ全面に広がる。すでに削平を受けている微高地の基盤となりうる土層と思われる。

出土遺物 遺物はテンバコP18に約10箱分が出土した。

10~48は8層出土である。10~32は深鉢である。10は縁帶文土器で波状口縁をなす。屈曲する口縁部外面に渦巻文を施す典型例といえる。今回出土した土器群中では古相を呈する。11も10と同様の波状口縁を有し、屈曲する口縁部外面に不整形な稍円を描く。12も波状口縁を有するが口縁部は屈曲しない点が異なる。波頂部の内面に緩やかな山形の平行沈線を施す。13は外側に強く屈曲する口縁部を有し、その内面に直線的な山形の文様を施す。14·15は平口縁である。14は屈曲する口縁部外面に3条の平行沈線を施し、その沈線間の無文部には縄文を磨り消した痕跡が残る。15は2条の平行沈線の間に右下がりの刻目を施す。胴部は外側ともに横方向の

卷貝殻条痕調整の後に軽くナデている。16はアサリと思われる貝殻による地文を磨り消し、その上下の沈線内には連続刺突を加えたいわゆる刺突沈線を施す。最上段の刺突沈線の上に連続刺突文がみられるが、卷貝殻頂部による可能性がある。刺突沈線の交差部に「6」字状単位文を施す。17は外反する頭部から緩く内湾する胴部上半で、断続的な平行沈線の間に入組みのある渦巻文を施す。山陰東部布勢式との関連をうかがわせる。18は沈線による区画が特徴的で、上下の沈線が部分的に弧線状に連結し、「つ」字状沈線が交互に開く方向を違えながら並列するようにみえる。中央付近には「6」字状の単位文を施す。沈線は時計回りに施されるのに対し、それと逆方向に沈線上をナデしている。19は縄文を磨り消したちに「6」字状と思われる単位文様を施し、その後に沈線を引いている。内面は卷貝殻条痕の後に軽くナデしている。20は縄文による施文部と磨り消し部が沈線により区画されている。下段の縄文の下部に下弦の連弧文を施す。なお、縄文については卷貝の回転施文による擬縄文の可能性がある。21の地文となる縄文は卷貝殻による擬縄文である。それを切るように沈線と上弦連弧文を施す。22は横方向の平行沈線文で区画された間をサルボウガイによると思われる二枚貝の腹縁による刻目によって充填する。23は緩やかに内湾する胴部下半である。外面は地文の縄文の上端に結節縄文、もしくは絡げ縄を施す。内面には横方向の卷貝殻条痕が残る。24は広口深鉢である。緩やかに外反する口縁部外面は横方向の卷貝殻条痕の後にナデしている。横方向の沈線で区画された下段の縄文帶上に下弦連弧文がみえる。口縁部内面には反時計回りの沈線を施す。胴部内面は横方向の卷貝殻条痕の後にナデしている。25は広口鉢である。口縁部外面には僅かに面取りがみられる。その下にはナデが残る。口縁部内面には沈線内刺突を巡らし、その下にはナデが残る。26は平口縁である。内面屈曲部を強くナデすることにより強く内屈させた口縁部外面の地文は縄文である。胴部外面は横方向の卷貝殻条痕のみが施され、内面は同様の条痕をナデしている。27は無文の平口縁である。ほぼ全面に横方向の卷貝殻条痕が残り、口縁部の稜線を作り出している。その屈曲部付近に径約1cmの補修孔が穿たれている。28も無文で、「く」字状に内屈する波状の口縁部である。内外面ともに横方向の粗い卷貝殻条痕が主であるが、口縁部については形状に沿って条痕を施す。内面の屈曲部以下にはコゲの付着が顕著である。29・30は無文の広口深鉢である。29は緩やかに外反する口縁部と緩やかに内湾する胴部を有し、その境界付近は僅かに括れる。口縁部外面は横方向の卷貝殻条痕の後にナデしている。胴部外面はやや左上がりの巻貝殻条痕で、幅1.7cm程度の作業単位が看取できる。胴部内面には横方向の巻貝殻条痕が僅かに残る。胴部外面の下半にはコゲバンドが残る。胴部内面のやや上方には吸水線がみえる。30も器形は29に近い。内外面ともに横方向の巻貝殻条痕の後にナデしている。外面には焼成時破裂痕がある。内面には幅約3cmの粘土紐の接合痕と思われる凹凸が複数みられる。31はやや外傾する口縁部を有する。外面は横方向の巻貝殻条痕の後にナデしているのに対し、内面は条痕をそのまま残す。そのため、内面には接合痕がみえる。32も31と同様の器形を呈する。内外面はともに貝殻条痕の後にナデしているが、原体はサルボウガイの可能性がある。

33~37は浅鉢である。33は内湾する口縁部で、貝殻条痕の後に時計回りの断続的な5条の沈線を引く。その後にやや乱れた「6」字状単位文を施す。白色系を呈する胎土を有し、やや異質な印象を受ける。34は径約15cmの平口縁を呈する。やや強く内湾する口縁部外面には磨消し縄文の上に約3cmピッチの時計回りの沈線を4条引く。胴部外面下半と同内面は横方向の巻貝殻条痕の後にナデしている。35は広口深鉢、もしくは楕形浅鉢である。外面は主に横方向の粗い巻貝殻条痕を施す。部分的にススが付着している。内面には板状工具によるナデつけの際にいたと思われるやや左上がりの工具の当たりがみえる。36も器形は35に類似し、口縁部を直立気味に立ち上げている。小片ではあるが、口縁部は僅かに波状を呈する可能性がある。外面は横方向の巻貝殻条痕を残すのに対し、内面はその上をナデしている。37は皿型浅鉢である。外面は左下がりの巻貝殻条痕、内面は横方向の巻貝殻条痕の後にそれぞれナデしている。このタイプで内面にも条痕を残す例は数少ないという(深井・岡田1998、P234)。

38~43は注口付土器である。38は連続刺突文を施す文様帶と無文部を沈線で区画している。このうち、最上段の無文の区画には逆「ノ」字状の突帯がみえる。下段の有文帯に接するようにある器壁の僅かな盛り上がりは注口の接合部部と思われる。39は無頭形有段口縁部に取り付く把手、もしくは口縁部突起である。各部位の稜線付近にはサルボウガイと思われる二枚貝に腹縁

文が僅かに残る。**40**は注口の接合部の可能性がある。注口が想定される周囲に刺突沈線を巡らせ、内側をサルボウガイと思われる二枚貝腹縁文で埋める。また、横方向の2条の沈線で区画された内側も同じくサルボウガイと思われる2段の二枚貝腹縁文で埋めている。外面の無文部分はナデであり、内面の器壁は粗いが、粘土紐の接合痕がみえる。**41~43**は注口である。**41**は下方にU字状の突窓を貼付けてあり、その頂部には刻みを、縦辺には沈線内連続突窓を施す。**42**は下方にボタン状の貼付けがみえる。**43**は注口の際から多重平行沈線を放射状に施す。**44**は器種不明の底部である。器壁に接する外縁を水平に地面につけ、底部中心部を凹ませ上げ底状にし、全面がナデられている。底径は5.5cmを測る。縦方向の貝殻条痕が僅かに残る。**45**は浅鉢の屈曲部と思われる。屈曲部に断面V字の施工具による沈線を引き、その上部の地文上に右下がりの入組み状の沈線を施す。この地文は全面というよりは沈線付近を中心で施されている。このような特徴から当地付近のものではなく、外來系の可能性が高い。**46**は粘土紐を粗く丸めており、器壁は粗くナデ・オサエられている。径は1.3cm、残存長さは4.2cmで、両端は欠損している。土偶の一部の可能性を指摘したいが、そもそも製品であるか否かについても断定できる材料が乏しい。**47~48**は石刀である。**47**は残存長17.7cm、最大幅3.3cm、現重量252.41gを計る刃部片である。成形時の敲打痕は残さないが、先端の刃部付近では縦方向の研磨の痕跡がみえる。断面形は先端部分が円形であるのに対し、破面付近では楕円形を呈する。石刀とはいっても、明確な刃部というよりも左右対称の尖った形状を志向したものと考えられる。**48**は残存長11.5cm、最大幅4.0cm、現重量213.18gを計る基部片である。調整は**47**と同様に研磨痕がみえる。肉眼観察では両者とも片岩系の石材と思われる。ただ、両者は別個の母岩による可能性が高い。また、**47~48**は直接接合しないこともあり、両者は別個体であると考える。

49～55は9層出土である。49は縄文地の上から渦巻状の平行沈線を描く。中津式と思われる。50は波状口縁を持つ深鉢で、小片のため波頂の単位は不明である。外面はとともに横方向の巻貝殻条痕の後にナデを施す。51は縁帶文土器の深鉢と思われる。口縁部外面に3条の沈線文を、その下位に右下がりの6条の平行沈線を施す。内面は横方向の貝殻条痕が残る。52は平口縁の深鉢である。外面はとともに横方向の巻貝殻条痕の後にナデしている。外面で粘土紐の接合痕がみえる。53は平口縁を持つ深鉢で、外面は縱方向の細密条痕で、小振りの二枚貝を原体としている。口縁部端部には縄文を施す。内面は横方向の貝殻条痕で、原体は外面と同じである。54は深鉢の底部と思われる。44とは異なり、器形はそのまま外反する胸部を持つと思われる。胴部下端には二枚貝による縱方向の条痕がみえる。底部は内外面とともにナデで仕上げている。55は胴部上端の外側に粘土帯を貼り付けることで作り出された口縁部である。管見の限り類例はないが、愛媛県平城貝塚を指標とする平城式の深鉢に求めることができるかもしれない(大飼2001)。

時 期

ごく一部に磨文繩文土器(福田K II式)や縁带文土器(北白川上層式1期)を含むが、概ね一乗寺K式の範疇に収まる。したがって、繩文時代後期中葉以降に埋没したと考えられる。

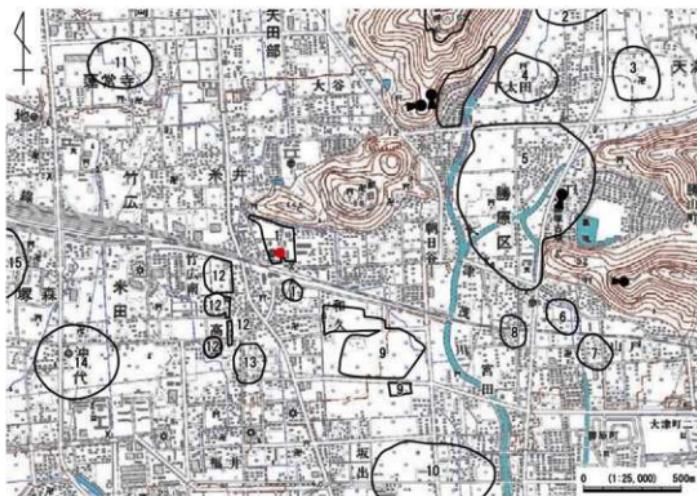
第3章 まとめ

縄文時代

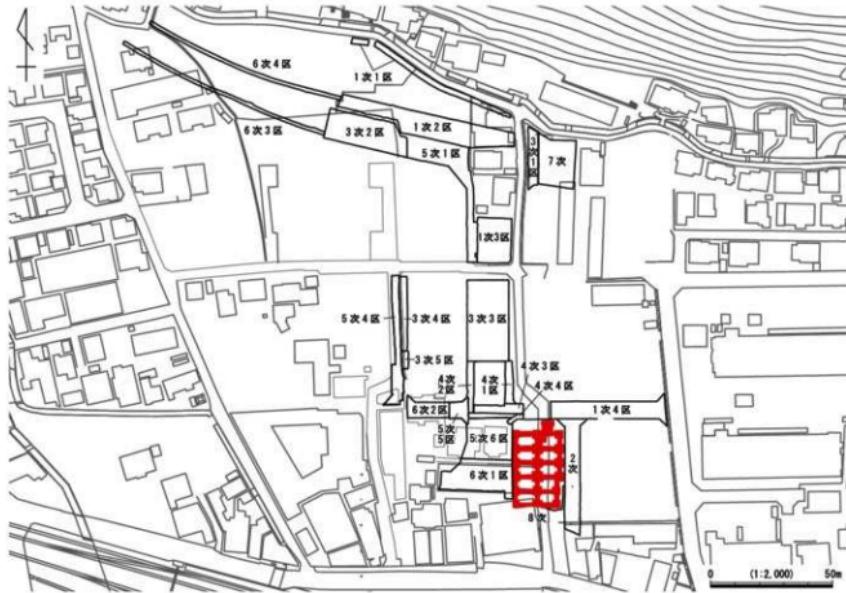
埋没した旧地形の落ちからは、現在、整理作業中の5次調査に引き続き、縄文時代後期中葉の比較的良好な資料を得ることができた。出土状況や土器自体の残存状況が極めて良好であったことなどを勘案すると、事業地の東側にはかつて当該期の集落が存在していた可能性が極めて高くなつたといえる。また、赤穂市堂山遺跡(赤穂市教育委員会編2008)とともに、一乗寺K式土器の分布域の西端を示す重要な資料を得ることができたといえる。

弥生時代・
古墳時代初頭

今回のような狭小な調査区にもかかわらず、弥生時代から古墳時代にかけての堅穴建物3棟を中心に、土坑やピット、溝状遺構、旧河道を確認することができた。古墳時代初頭のSI3では、柱穴を持たないタイプの堅穴建物を検出するとともに、当該期の集落の新たな資料を追加することができた。また、NR1からはほぼ完全に復元できる広口壺が出土した。これらにより、闇ノ口遺跡の集落としての遺構密度の高さと残存状況の良好さを改めて認識できた。

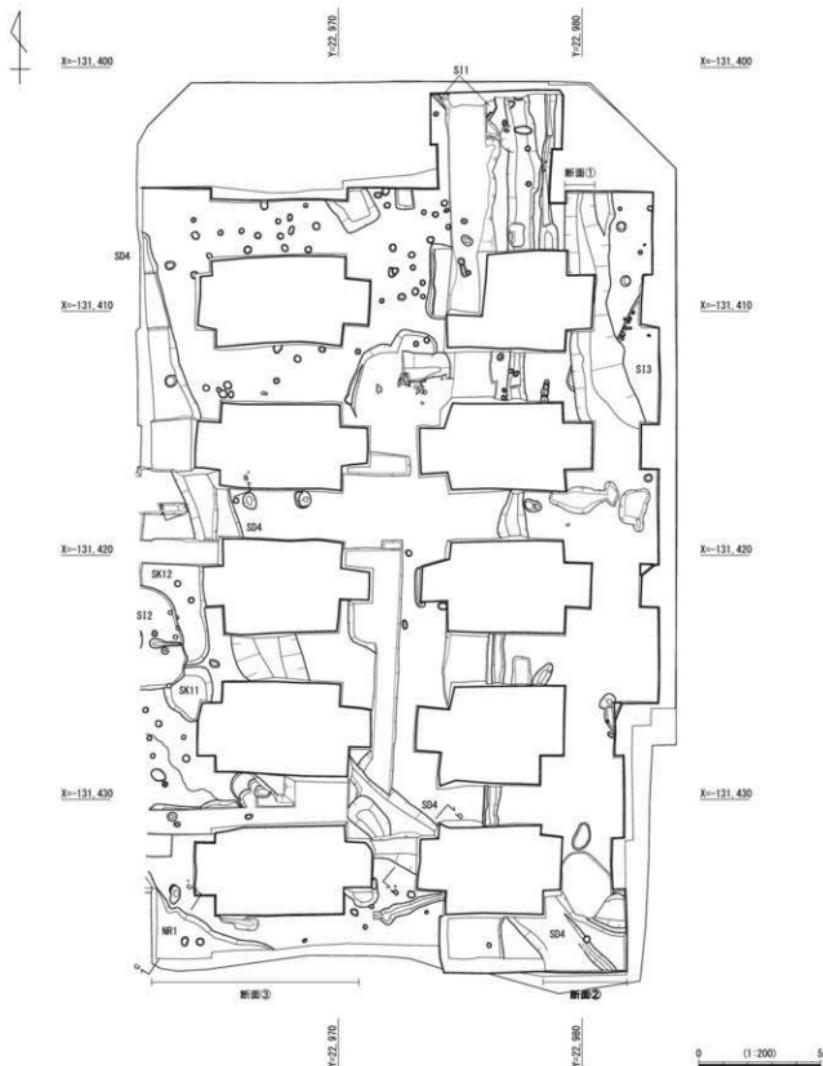


1. 関ノ口遺跡の位置と関連する周辺の遺跡

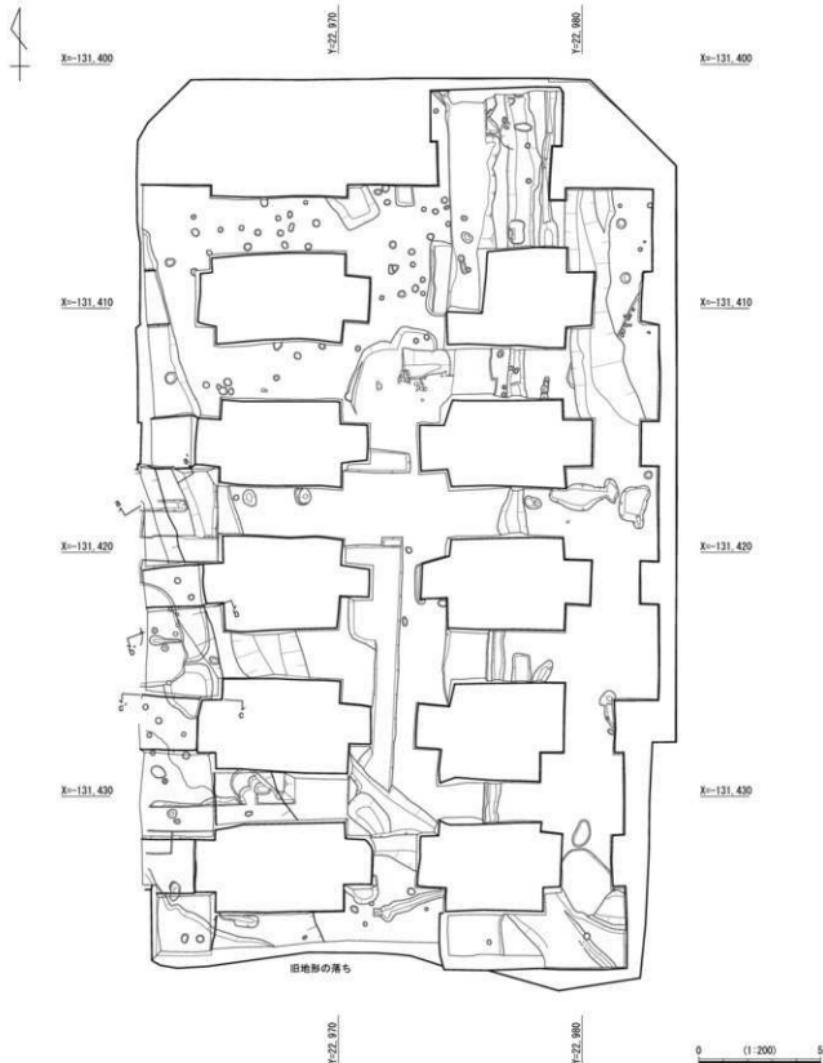


2. 今回の調査位置と既往の調査区

図版 2



調査区全体図（弥生時代以降）



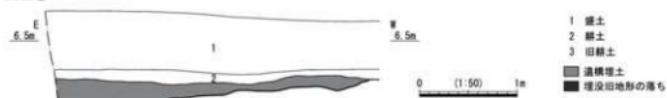
調査区全体図（縄文時代）

図版4

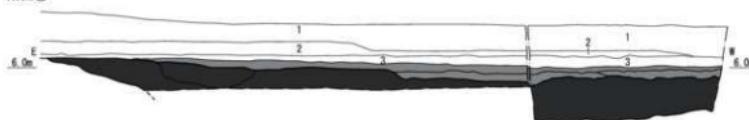
断面①



断面②

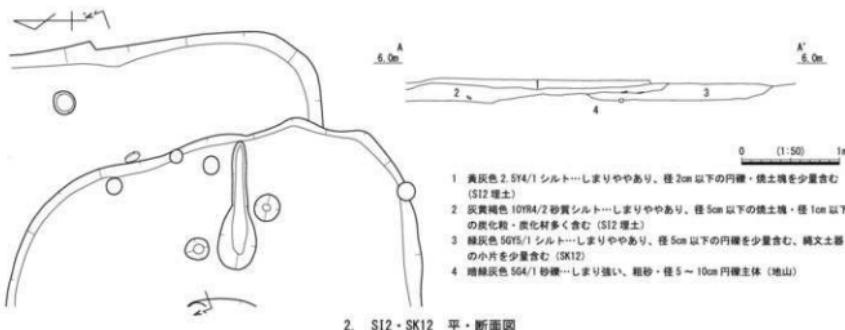


断面③

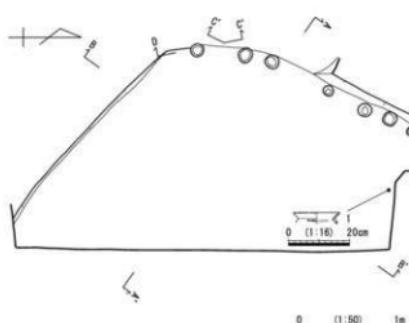


1. 調査区基本土層

0 (1:60) 1m



2. SI2 - SK12 平・断面図

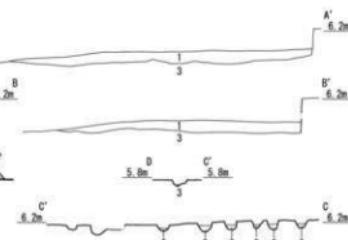


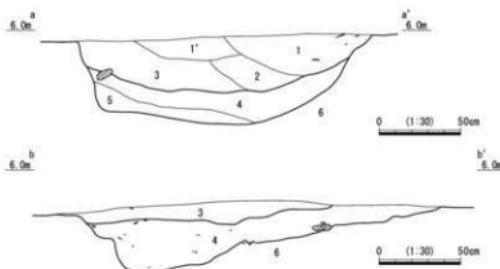
3. SI3 平・断面図

1 細黄褐色 2.SY5/2 シルト…しまりややあり。比較的均質。径 0.5cm 以下の
 細化物を少量含む

2 オリーブ黒色 7.SY3/2 砂質シルト…しまり弱い。径 1cm 以下の円錐含む

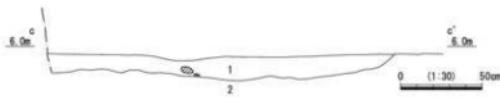
3 緑緑灰色 5Gy5/1 砂質…しまり強い。粗砂・径 5 ~ 10cm 圓錐主体 (地山)



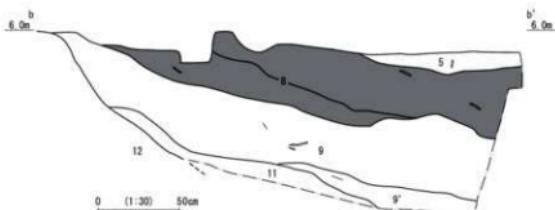
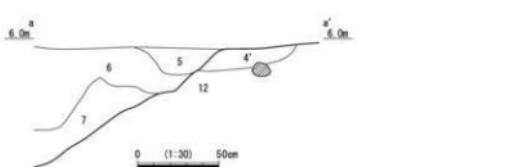


- 1 灰色 7.5Y5/1 ソフト…しまりやや強い、粗砂・径 3cm 以下の円錐主体。土器片多く含む
- 1' 灰色 7.5Y5/1 ソフト…1 層に近いが、円錐少ない
- 2 1~3 層の漸移的な様相を呈する
- 3 灰オーラープ色 5Y5/2 シルト…しまり弱い、比較的均質
- 4 緑灰褐色 10E8/1 ソフト…しまり弱い、粗砂主体。径 1cm 以下の円錐やや多く含む。土器片多く含む
- 5 緑灰褐色 2.5Y5/2 ソフト質土…粗砂・径 5cm 以下の円錐主体。しまり強い (地山)
- 6 塗報灰褐色 504/1 ソフト…粗砂・径 5cm 以下の円錐主体。しまり強い (地山)

1. SD4 土層断面図

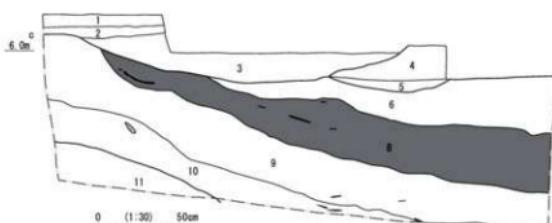


- 1 黒褐色 2.5Y3/1 ~ 黄灰色 2.5Y4/1 シルト…しまりややあり、径 5cm 以下の円錐少量含む
- 2 灰オーラープ色 7.5Y6/2 シルト…しまりやや強い。やや不安定な印象を受ける (地山)

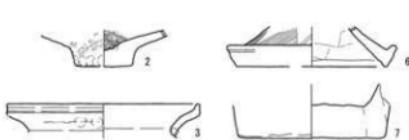


- 1 軽土
- 2 土壌化層
- 3 SK11 塗土
- 4 灰色 7.5Y6/1 シルト…しまりやや強い。汚れた印象を受ける
- 4' 本来は 4 層であったが、5 層の堆積時に影響を受け層位置をとどめている可能性がある。
- 5 緑灰褐色 506/1 ソフト…粗砂・径 2cm 以下の円錐主体。しまり強い
- 6 灰オーラープ色 7.5Y6/2 シルト…しまりやや強い。やや不安定な印象を受ける (地山)
- 7 青灰色 508/1 ソフト…粗砂・径 2cm 以下の円錐主体。しまり弱い
- 8 黒褐色 10YR3/1 黏土質…粘性・しまり弱い。径 1cm 以下の液化化物が多く含む。純土土器片多く含む
- 9 反黄褐色 10YR6/2 シルト…粘土…色調以外は 10 層に近いが純土土器片を少量含む
- 9' 9 層の一部であるが、砂質やや強く土器片を多く含む
- 10 オリーブ灰色 10Y4/2 シルト…しまりやや強い。比較的均質。純土土器片ごく少量含む
- 11 に近い黄褐色 10YR7/4 シルト…粘土…しまり強い。粘質 (地山)
- 12 塗報灰褐色 504/1 ソフト…粗砂・径 5cm 以下の円錐主体。しまり強い (地山)

3. 埋没旧地形の落ち 土層断面図



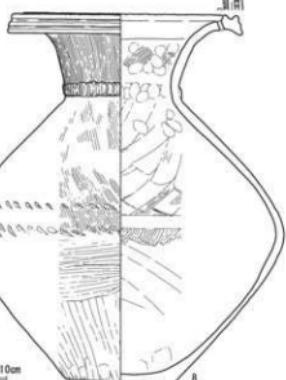
図版 6



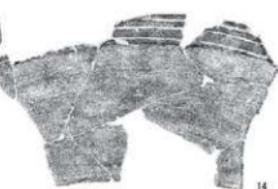
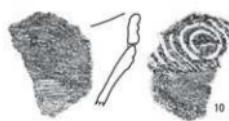
2~4: 上層
5~7: 下層



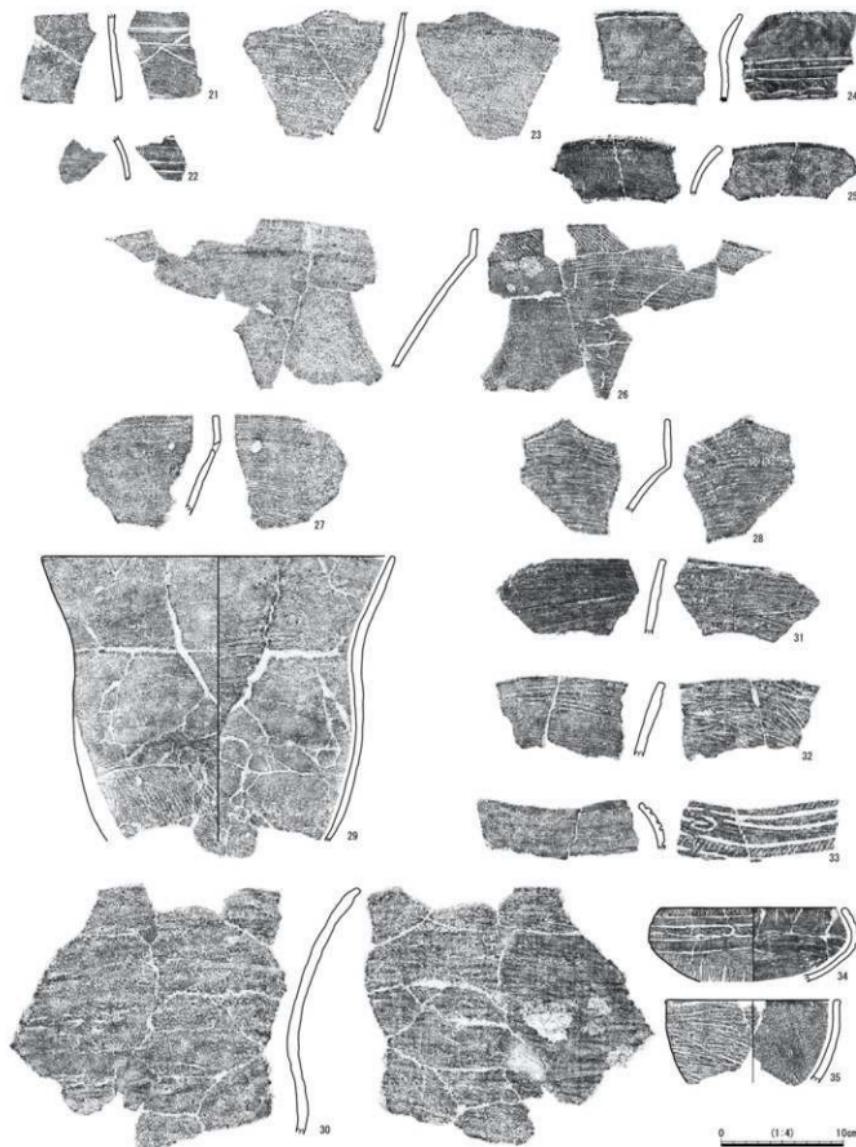
2. SD4 出土器



3. NR1 出土器

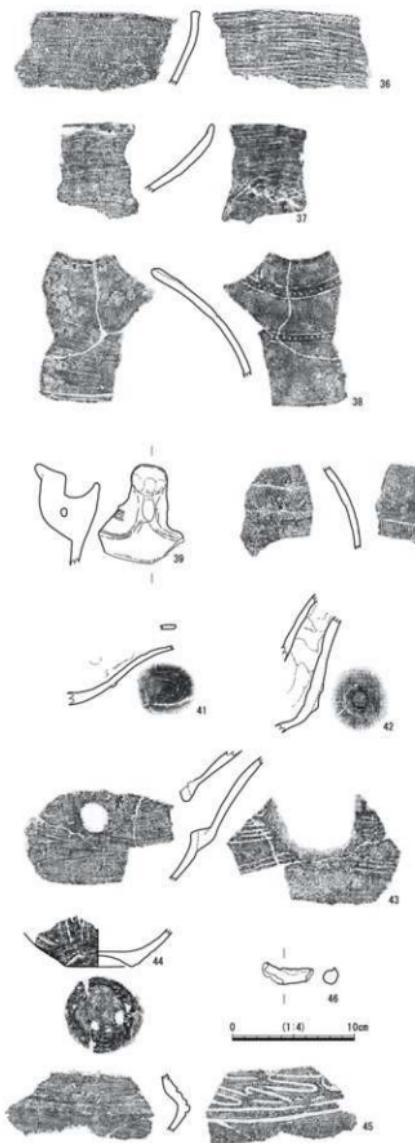


4. 旧地形の落ち(8層) 出土土器1

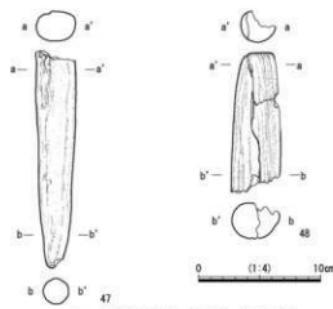


旧地形の落ち（8層）出土土器2

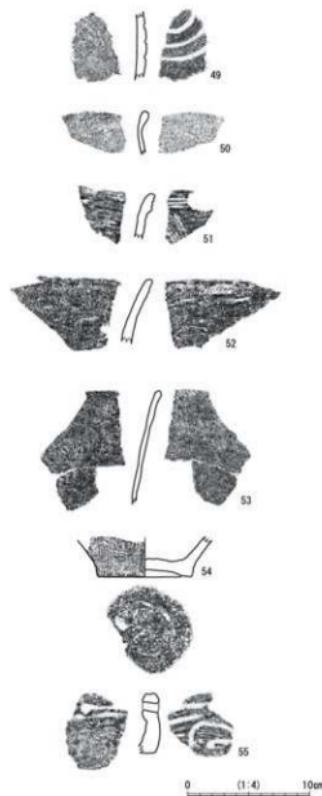
図版8



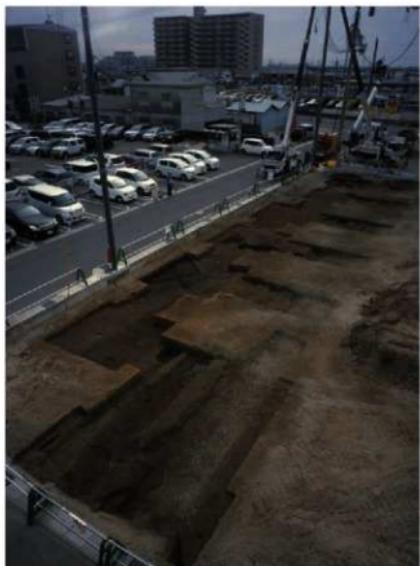
1. 旧地形の落ち（8層）出土土器3



2. 旧地形の落ち（8層）出土石器



1. 旧地形の落ち（9層）出土土器2



1. 調査区東半全景（北西から）



3. 調査区基本土層 断面③（東半）



4. 調査区基本土層 断面③（西半）



2. 調査区西半全景（北西から）



5. SI2（北から）



6. SI3（西から）

写真図版 2



1. NR1弥生土器8 出土状況（西から）



4. 埋没旧地形の落ち b-b' 断面



2. 埋没旧地形の落ち（北西から）



5. 埋没旧地形の落ちc-c' 断面



3. 埋没旧地形の落ち（西から）



7. 空中写真撮影状況（北西から）



8



11



12 (外面)



10



12 (内面)



15



16



17



18



17 (入組みのある渦巻文)



19



20



22



21



23



24 (A34032)



25 (A34033)



24



28 (外面)



27



28 (内面部分)



31 (内面)



31 (外面)



32 (外)



34



32 (内)



37



33



36



39

写真図版 8



38



41



40



46



42



報告書抄録

ふりがな	せきのくちいせき							
書名	関ノ口遺跡							
副書名	第8次発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第110集							
編著者名	福井 優							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	令和3年（2021年）3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
せきのくちいせき 関ノ口遺跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 網干区和久 509-1	28201	020334	34° 48' 54"	134° 35' 04"	2020.1.14 ～ 2020.2.27	447m ²	建物建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		遺跡調査番号		
集落	縄文・弥生 ～ 古墳・奈良・平安・中世	堅穴建物・土坑・ピット 溝状遺構・旧河道・ 埋没地形		縄文土器・弥生土器 古式土器・石器			20190496	
要約	弥生時代から古墳時代にかけての堅穴建物を中心に、土坑やピット、溝状遺構、旧河道を確認した。溝状遺構は洪水砂により埋没していたが、その際に大量の土器も含んでいたことから、上流に弥生時代から古墳時代にかけての集落域が存在すると考えられる。また、弥生時代以前の旧地形が埋没した堆積土中から、縄文時代後期の多くの土器及び石刀が出土した。事業地の東側にかつて縄文時代の微高地が存在し、そこから崩落に伴い落下したものと思われる。当該期の縄文土器は市内をはじめ播磨を見渡しても類例が少なく、貴重な発見といえる。							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第110集

関ノ口遺跡

－第8次発掘調査報告書－

令和3年（2021年）3月31日発行

編集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL (079) 252-3950

発行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田西丁目1番地

印刷・製本 内海印刷株式会社
〒670-0808 兵庫県姫路市白国5-8-4

